ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2020

整理番号 No.	科　目　名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
401	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ（齊藤泰治）	春学期	３年以上：２単位	齊藤　泰治
		2014年度以降入学者　算入科目区分		
		グローバル　演習、政治/経済/国際政経　専門演習		

副　題 Subtitle

ジャーナリズムの視点からの中国研究Ⅰ

授業概要 Course Outline

本演習は「ジャーナリズム・メディア演習」として設置されており、中国に関してジャーナリズム的な視点から研究することを目的とする。具体的には、中国に関する報道を通して中国を研究するという側面と、ジャーナリズム、報道について研究するという側面を含む。このような研究を行うためには、中国の政治、社会、文化、歴史をはじめとする諸分野に対する旺盛な関心と知識が必要であると同時に、グローバルな視点からジャーナリズム、報道に関する研究を行うことが必要となる。基礎となる文献を読み、具体的な報道事例等を通してジャーナリズム的視点から中国研究を進めるための方法論を組み立てていく。

授業の到達目標 Objectives

これまでの内外の研究成果を踏まえ、中国報道に関して現状分析のための基礎力を身につけることによって、ジャーナリズムの視点から中国を研究することができるようにする。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

一週間単位で中国に関する報道、ニュースを調べ、関連する資料によって理解を深めて演習に臨むことを基本とする。具体的な内容については初回のオリエンテーションで説明する。

授業計画 Course Schedule

第１回目はオリエンテーションを行う。第２、３回は資料について説明する。第４回以降は資料を読むと同時に、受講者に研究発表をしてもらう。最終回は全体のまとめを行う。

教 科 書 Textbooks

特定の教科書は使用しない。

参考文献 Reference Books

随時紹介する。

評価方法
Evaluation

	割　合（%） Percent(%)	評 価 基 準 Description
試　　験 Examinations	0%	試験は行わない。
レポート Papers	70%	レポートのテーマを最初から計画的に考え、提出期限までに提出するものとする。
平常点評価 Class Participation	30%	出席するだけでなく、授業への積極的貢献をもとに評価を行う。短いレポートを随時書いてもらう。
そ の 他 Others	0%	コミュニケーションを大切にしてほしい。

備考・関連URL
Note・URL

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2020

整理番号 No.	科　目　名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
402	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ（瀬川至朗）	春学期	３年以上：２単位	瀬川　至朗
		2014年度以降入学者　算入科目区分		
		グローバル　演習、政治/経済/国際政経　専門演習		

副　題 Subtitle

次世代ジャーナリズムの研究と調査取材・ルポルタージュの実践

授業概要 Course Outline

【現実の課題と次世代ジャーナリズムの模索】
ジャーナリズムは何のためにあるのか。Kovachらは「ジャーナリズムの第一の目的は、市民にたいして自由と自治に必要な情報を伝えることだ」(The Elements of Journalism) と指摘する。市民の「知る権利」に応え、成熟したな議論に必要な真実に迫り、伝えていくことがジャーナリズムの役割である。しかし現実には、政府のプロパガンダを無批判に伝えるマスメディアの発表報道がはびこり、視聴率重視のテレビ報道がメディア不信を醸成する一因となっている。ネット社会もメディアの変革を迫っている。フェイクニュースも直面する課題である。信頼できる、新しいジャーナリズムのあり方が模索されている。

【演習全体の目標】
本演習（Ⅰ～Ⅳ）は、基本的な文献講読をつうじ、デジタル時代のジャーナリズムの機能と課題について理解を深め、新しいジャーナリズムに必要な要素について考える、また、ジャーナリズムの実践として、さまざまな社会問題について受講生が能動的な問題意識をもって調査・取材に取り組む力を身につけ、一般読者を対象とする調査取材記事やルポルタージュ（映像作品も可）の制作をめざす。人数は限られるが、卒業論文を書く学生も受けいれる。

【ファクトチェックとデジタル・ジャーナリズムの実習】
フェイクニュースなどの不確かな情報を検証するファクトチェックや、デジタル時代に必要なスキルとしてデータジャーナリズムの手法なども学ぶ。

【ゼミウェブマガジンWaseggへの掲載】
各演習で制作した記事・映像作品やファクトチェック記事はゼミ生のウェブマガジン『Wasegg』(http://wasegg.com)に随時掲載する。

【演習Ⅰの概要】
文献講読と実習の両面で基礎力を養う。文献講読では、ジャーナリズムの機能と課題について理論的に学ぶとともに、フェイクニュースの実情やファクトチェック活動についても理解を深める。実習では、地域や大学、人物に焦点をあてた記事を制作する。また政治言説やネット情報のファクトチェックの実践をおこなう。演習の後半では、数人のグループ取材を想定し、取材テーマにしたい具体的な社会問題について調査し、取材の準備を進める（実際のグループ取材は演習Ⅱでおこなう)。

＜参考：社会問題の例示＞
社会問題としては、以下のようなものを例示できる＝格差と貧困、LGBT、メディア・ジャーナリズムの諸問題、フェイクニュース、ファクトチェック、若者と政治、高齢者問題、医療介護、人口減社会、外国人と日本社会、原発問題、震災復興、沖縄基地問題、環境問題など（あくまで例示であり、これらにこだわる必要はない)

授業の到達目標 Objectives

デジタル時代のジャーナリズムの機能と課題について理論的に理解する。また、自ら能動的な問題意識をもって問題に迫り、根拠をもって市民に伝えるコミュニケーション力を、実習をつうじて習得する。また、ジャーナリズムの実践をつうじて批判的なメディア分析力を習得し、ニュースを読み解く力を養う。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画
Course Schedule

１回：・ガイダンス。ファクトチェックについての講義
２～３回 ・ファクトチェックの実習
４～11回・取材手法（写真撮影など）の実習
・地域・大学・人物記事の取材と記事執筆。
・記事についての報告と議論。
・ファクトチェックの実践、記事化
・ジャーナリズム・メディア関係の文献購読
12～15回： ・夏期のゼミ調査取材合宿についてのグループ企画案の提案と文献調査・事前取材

2019年９月中旬（予定） ゼミ調査取材合宿

※学期中のサブゼミではメディア人セミナーを開催（不定期）

教 科 書
Textbooks

演習で講読する文献は初回のガイダンスまでに指示する。

参考文献
Reference Books

瀬川至朗 『科学報道の真相 —— ジャーナリズムとマスメディア共同体』 ちくま新書
外岡秀俊 『「伝わる文章」が書ける作文の技術』 朝日新聞出版
野村進 『調べる技術・書く技術』 講談社新書
加藤秀俊 『取材学——探求の技法』 中公新書
E・パリサー 『フィルターバブル——インターネットが隠していること』 井口耕二訳・早川書房
『山本美香最終講義 ザ・ミッション 戦場からの問い』 早稲田大学出版部
亘英太郎 『ジャーナリズム「現」論』 世界思想社
W. リップマン 『世論（上）（下）』 掛川トミ子訳・岩波文庫
B. Kovach & T. Rosenstiel ″The Elements of Journalism″ 3rd Edition, Three River Press, 2014（邦訳『ジャーナリズムの原則』 加藤岳文／斎藤邦泰訳・日本経済評論社）
B. Kovach & T. Rosenstiel ″Blur: How to Know What's True in the Age of Information Overload″Bloomsbury Publishing plc, 2011（邦訳『インテリジェンス・ジャーナリズム』 奥村信幸訳・ミネルヴァ書房）
J. Gray et al. ″The Data Journalism Handbook″ O'Reilly
L. Bounegru et al. ″A Field Guide to Fake News″ supported by First Draft
T.Harrower （2012）“Inside Reporting -- A Practical Guide to the Craft of Journalism” 3rd edition
『Journalism』（朝日新聞発行）の関連特集

評価方法
Evaluation

	割 合（%） Percent(%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	期末レポート、学期中に提出してもらう地域・大学・人物記事
平常点評価 Class Participation	50%	ゼミへの出席、ゼミでの発表とレジュメ、他の受講生の発表への質疑などを総合的に評価する。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

ゼミ合宿（研修旅行）を実施します（2016年９月＝金沢、2017年９月＝沖縄、2018年９月＝福島、2019年９月＝沖縄）。ゼミ活動の一環として全員参加を原則とします。

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2020

整理番号 No.	科　目　名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
403	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ（高橋恭子）	春学期	３年以上：２単位	高橋　恭子
		2014年度以降入学者　算入科目区分		
		グローバル　演習、政治/経済/国際政経　専門演習		

副　題 Subtitle

ジャーナリズムの現在と未来～映像ジャーナリズムを中心に

授業概要 Course Outline

権力を掌握する人物が根拠のない発言をする、自己の主張に合わない意見を退ける、多様な価値観を認めないなど閉塞的な状況が世界中で見られ、真実が犠牲になる「ポスト真実」の時代といわれている。かつて、権威あるメディアがニュースのゲート・キーパー（門番）として、出来事を発見し、解釈し、発信していたが、テクノロージ―の発達により情報発信が加速化し、錯綜する現代においては、何が真実で何が真実でないかの判断は私たちひとりひとりが判断し、ゲートキーパー役を担う必要がある。本演習では、映像コンテンツの分析と実践から現在のジャーナリズムとメディアのあり様を検証する。

具体的には、１．講義と討論「映像メディア検証」、２．学生によるメディア分析、３．学生による取材・調査、４．次世代ジャーナリズム関連書の購読、５．成果物（文章、映像、写真、Web等）の制作・発表・評価から構成する。映像メディア分析では、メディア・リテラシー研究の分析手法を採用し、Ⅰメディア・テクスト、Ⅱオーディエンス、Ⅲテクストの生産・制作の３つの領域から考察する。

2020年度は、世界100数カ国のモニターグループが参加して、世界のメディアを一斉にモニター調査するプロジェクトであるグローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト（GMMP、World Association for Christian Communication主催）に参加する。新聞、テレビ、インターネット上のニュースをジェンダーの視点から分析する。

本演習では、毎年、テーマに沿った企画を学生自らが設定し、取材後に文章を発表している。これまで取り上げたテーマは、「被災地のメディア」「ポジティブ・福島」（福島の復興について）、「戦後70年の記憶と記録」「新たな映像ジャーナリズムへの挑戦」「平成とはどういう時代だったのか」である。19年度は「多様性と共生～分断を超えて」をテーマに障害者と移民問題、ひきこもりや格差の背景などの取材を行う。2020年度は「ジェンダーとメディア」を取り上げる予定である。ゼミ合宿は、2013年度より福島で実施している。震災９年目に当たる2019年度は、南相馬市において歴史あるものと新しいものが合体し、後世に伝えようとする試みや自立した復興の動きを市内の小学校とともに取材、撮影する。

授業の到達目標 Objectives

メディアをクリティカルに分析する力とメディアを創造する実践的な力を養う。

実践はドキュメンタリー、フォトストーリー、Webコンテンツ、ソーシャルメディアを利用したコンテンツなど個々の知識と能力によって選択する

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

文献やニュース番組分析を通して、メディアをクリティカル分析する力を養う。この経験から、自らテーマを設定し、取材活動を行う。取材した内容は、ゼミのサイトなどで原稿や映像として発表する。

授業計画
Course Schedule

第１回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）
オリエンテーション、「インテリジェンス・ジャーナリズム」の輪読とまとめ
第２回：購読「インテリジェンス・ジャーナリズム」
「インテリジェンス・ジャーナリズム」のまとめと理解度の確認
第３回：ワークショップ
輪読「ファクトチェックとは何か」
第４回：映像制作
公共広告「私のキャンパス」制作準備
第５回：メディア分析
メディア・リテラシーのアプローチによるワークショップ課題図書発表
第６回：メディア分析
学生によるメディア分析プレゼンテーション課題図書発表
第７回：コミュニケーションをつくりだす
映像による公共広告のプレゼンテーション
第８回：ファクトチェックとメディア・リテラシーワークショップ
ファクトチェックとメディア・リテラシーワークショップ
第９回：メディア分析
学生によるメディア分析プレゼンテーション課題図書発表
第10回：ニュース分析
ニュース分析発表　課題図書発表
第11回：ニュース分析
ニュース分析発表　課題図書発表
第12回：企画のブレーンストーミング
夏休みの課題　企画のブレーンストーミングによりテーマを設定
第13回：ニュース分析
ニュース分析発表　課題図書発表
第14回：ニュース分析
ニュース分析発表　課題図書発表
第15回：テーマ設定と企画、調査、取材の発表
夏休みの課題のテーマ設定と予備調査/取材の結果のプレゼンテーション

教 科 書
Textbooks

そのつど、印刷物を配布する

参考文献
Reference Books

「NHK」松田浩　岩波新書
「NHKvs日本政治」 エリス・クラウス　東洋経済新報社
「メディア・リテラシー教育　学びと現代文化」、デビッド・バッキンガム　世界思想社
「メディア・リテラシーの現在と未来」鈴木みどり編著　世界思想社
「マスコミュニケーション研究」デニス・マクウェル　慶応義塾大学出版会
「ジャーナリズムの原則」ビル・コバッチ、トム・ローゼンスティール　日本経済評論社
「インテリジェンス・ジャーナリズム」ビル・コバッチ、トム・ローゼンスティール　ミネルヴァ出版
「フェイクニュースを科学する」笹原和俊　化学同人
「ファクトチェックとは何か」　立岩陽一郎、楊井人文　岩波ブックレット
「フェイクと憎悪」　永田浩三編　大月書店

評価方法
Evaluation

	割　合（%） Percent(%)	評 価 基 準 Description
試　　験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
そ の 他 Others	100%	試験: 0% なし レポート: 25% メディア分析　メディアリテラシーの理解度。 平常点評価: 50% 出席と授業の主体的参加度。 その他: 25% コンテンツのプランニングと実践力。

備考・関連URL
Note・URL

映像制作のための技術を身につけたい場合は、グローバルエデュケーションセンター開講の副専攻「ジャーナリズムとメディア表現」の「映像芸術表現」「制作プロジェクト研究」の映像系科目を受講することをお薦めします。

関連URL：

ゼミサイトは「Action! from critical to creative」

http://www.waseda.jp/sem-kytwaseda/

facebook「高橋恭子ゼミ」

ゼミ紹介

https://www.waseda.jp/fpse/pse/news/2017/12/11/8269/

原則、３、４年合同で木曜日の４，５時限に実施します。卒論や３年生のプロジェクトのまとめ時期には別に実施することもあります。

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2020

整理番号 No.	科　目　名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
404	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ（土屋礼子）	春学期	３年以上：２単位	土屋　礼子
		2014年度以降入学者　算入科目区分		
		グローバル　演習、政治/経済/国際政経　専門演習		

副　題 Subtitle

近現代史におけるメディアとプロパガンダ、およびジャーナリズム

授業概要 Course Outline

近現代の日本および欧米におけるメディアとジャーナリズムの発達の経緯を理解し、検閲制度をはじめとする政府との関係、政治家とジャーナリズムの関係、世論を動かすためのプロパガンダという思想がどのように展開してきたかを、実証的に学び議論する。また、実際にメディアやジャーナリズムに関係した人々にインタビュー調査や資料探索を行ない、メディアの歴史や、メディアに対するアプローチのしかた、メディアの分析のしかたに関する知見を深め、年度末には各自が卒論テーマを見いだせるよう研究をすすめる。なお、2020年度は、政党機関紙のOBにインタビュー調査する予定である。

授業の到達目標 Objectives

メディアとジャーナリズムに関する基本的知識を学ぶだけでなく、それを活用し、自分で資料を探索し読み解き、思考する能力を養う。また実際にインタビュー調査を行う力量を育成する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

授業計画 Course Schedule

第一回：オリエンテーション
第二回～第六回：英語文献講読
第七回～第十一回：日本語文献講読
第十二回～第十五回：インタビュー調査の目的及び計画の説明と準備

教 科 書 Textbooks

初回の授業には、藤竹暁編著『図説　日本のメディア』(NHKブックス、2018年）を読んだ上で、持参すること。
その次からは、開講時に配布する英文テキストを読む。
以降は授業中に指示する。

参考文献 Reference Books

関連文献については、随時紹介する。

評価方法
Evaluation

	割　合（%） Percent(%)	評 価 基 準 Description
試　　験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	二回ほどレポートを指示する。
平常点評価 Class Participation	50%	英語文献及び日本語文献の講読の際に行う報告、発言、議論を評価対象とする。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

積極的な質疑応答、議論を評価します。

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2020

整理番号 No.	科　目　名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
405	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ（中村理）	春学期	３年以上：２単位	中村　理
		2014年度以降入学者　算入科目区分		
		グローバル　演習、政治/経済/国際政経　専門演習		

副　題 Subtitle

内容分析を中心に用いたメディア・メッセージの実証研究：ヒューマン・コーディング編

授業概要 Course Outline

本演習は、内容分析という手法を使ってメディアの送り出す情報を実証的に分析することを目標にしています。

あなたはメディアを通じて得る情報に疑問を持ったことはないでしょうか。たとえば、原発報道はどういった経緯を経て今にいたっているのか、経済問題に報道は一貫した姿勢で対処してきたのか、CMやドラマにあらわれるジェンダー観は時代とともにどう変わってきたのか、などです。こうした疑問のもととなる情報（メッセージ）は、日々、新聞やテレビ、インターネットなどから大量に発信されています。そこにはどういった特徴や傾向があり、その背後には発信者のどういった情報選択があるものでしょうか。

本演習では、こうしたあなたの興味を分析していきます。分析の主題は政治でもジェンダーでも文化でも構いません。また、対象は報道でも映画でもコマーシャルでもSNSでも構いません。マス・コミュニケーション上あるいはジャーナリズム上の興味をもって、メディアに流れる情報をぜひ実証的に・科学的に分析してみましょう！

そのために、本演習では内容分析という手法を学びます。内容分析とは、単に内容を分析するという抽象的なものを指すのではありません。どういう手順で何をするかが決まっている、ある科学的な分析手法の名称なのです。この内容分析では、メッセージの内容をコード（記号）化して分析します。たとえば、登場人物を「政治家」や「専門家」といったコードに分類したり、論調を「ポジティブ」や「ネガティブ」といったコードに分類したり、です。そして、それらコードが何回あらわれるかを数えるなどし、発信される情報を量にして、情報の特徴をとらえていきます。こうすることで、流れる情報を客観的に扱えるようにします。

コード化には主に２つの技法があります。当演習では（１）学部３年次前半にヒューマン・コーディングという技法を、（２）後半にコンピュータ・コーディングという技法を学び、４年次に卒業研究に取りくみます。

内容分析は、マス・コミュニケーションやジャーナリズム研究によく使われるほか、企業が顧客のクチコミを分析してマーケティングに役立てることにも利用されています。この手法を使って、ジャーナリズム、マス・コミュニケーション、あるいはメディア上の課題やあなたの疑問に挑みましょう。あなたの興味とやる気を、ぜひ具体的な形にしてみてください。

この演習では、一つの主題や目標を複数の受講者が共有し、チームで議論をしながら協調的に作業を進める活動を主体にしています。これにより、専門性を深めるだけでなく、チームの中で目標を共有し、困難に面したときに助け合ったり責任を分担したりして解決する経験をつんでみましょう。この経験は、将来、あなたが専門課程で研究を行ったり、職場で同僚と協調的に仕事をしたりする際に必ず役に立ちます。

授業の到達目標 Objectives

・実証的な調査の流れ（問題意識～仮説～調査計画～実施～結果の整理～分析～考察～結論）を経験し、その要領を学ぶ。
・分析法を習得する。（演習Iはヒューマン・コーディング、演習IIはコンピュータ・コーディング）
・分析力を高める。
・マス・コミュニケーション、ジャーナリズム、メディア上のなんらかの課題に建設的に言及する。
・チーム内でコミュニケーションをとりながら協調的に作業をし、課題を解決する。
・以上を通じ、特定の専門知識だけでなく、社会に出た際の汎用的なスキルを身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

当演習は反転授業を取り入れています。授業後は次の授業に向けた課題を各自がおこない、教場では時間と場所をチームのメンバーと共有するメリットを活かして協調学習やチームワークに取りくみます。たとえば、論文を読む際には事前に読んだり演習問題に回答したりし、当日に教場で発表と議論をします。チームワークではその日までの進捗に応じて次までの目標をチームごとに立て、その目標に向けた作業を各自がおこない、それを持ちよって次の授業をすすめます。

授業計画
Course Schedule

第１回：オリエンテーション
第２回：内容分析とは？　Ｉ：研究論文を読む（プレ演習の論文読解の続き）
第３回：内容分析のデザインと実践１：　調査主題を提案する・決める
第４回：手法を学ぶ１：内容分析の歴史
第５回：内容分析のデザインと実践２（チームワーク）：問いをたてる・対象をきめる・変数とカテゴリを設定する
第６回：手法を学ぶ２：内容分析の設計
第７回：内容分析のデザインと実践３（チームワーク）：テスト・コーディングを始める
第８回：手法を学ぶ３：サンプリング
第９回：内容分析のデザインと実践４（チームワーク）：テスト・コーディングをもとに計画を再検討する
第10回：手法を学ぶ４：ヒューマン・コーディング
第11回：内容分析のデザインと実践５a（チームワーク）：コーディング・マニュアルを書く・完成させる I.
第12回：内容分析のデザインと実践５b（チームワーク）：コーディング・マニュアルを書く・完成させる II.
第13回：手法を学ぶ５：信頼性を検定する
第14回：内容分析のデザインと実践６（チームワーク）：コーディング結果を集計するI／コーダへ依頼する
第15回：内容分析のデザインと実践７（チームワーク）：コーディング結果を集計するII／レポートにまとめる
第16回：成果を発表する：レポートの提出と発表

教科書
Textbooks

必要に応じて授業内で提示

参考文献
Reference Books

必要に応じて提示。以下、参考まで：
有馬明恵『内容分析の方法』（ナカニシヤ出版、2007年）
クラウス・クリッペンドルフ『メッセージ分析の技法-「内容分析」への招待』（勁草書房、1989年）
ダニエル・リフ他『内容分析の進め方』（勁草書房、2018年）
田崎篤郎・児島和人『マス・コミュニケーション効果研究の展開（改訂版）』（2003、北樹出版）
竹下俊郎『メディアの議題設定機能―マスコミ効果研究における理論と実証（増補版）』（2008、学文社）
佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック』（2008、ひつじ書房）
戸田山和久『論文の教室』（日本放送出版協会）

評価方法
Evaluation

	割　合（%） Percent(%)	評価基準 Description
試　　験 Examinations	0%	試験は行いません。レポートを実施しない場合にのみ代替として検討します。
レポート Papers	30%	20--40%。半期ごとになんらかのまとめをおこないます。最終的に調査・分析の結果あるいはその進捗状況をレポートおよび発表資料にまとめたうえで発表します。その際の提出物と発表内容で評価します。
平常点評価 Class Participation	55%	50--70%。授業への参加態度、課題・分析への取り組み、チームへの貢献をもとに評価します。各自が目的を持ち、主体的・協調的に作業することを重視します。
そ の 他 Others	15%	ゼミの運営や行事に協調的にかかわる活動を評価します。また、上記以外で特筆すべき事項、推奨履修科目の学習状況等も、ここに計上します。

備考・関連URL
Note・URL

https://semi.on-w.com/
https://twitter.com/nakamura_semi

研究は主に、学生であるみなさん自身が次までの課題を決めて宿題を持ちより、メンバーと議論をしながらチームで協調的に作業をすることによって進めます。理科でいえば「実験」のようなもので、机上で考えるだけでなく、ポジティブなコミュニケーションで人と協働しながら手を動かし、自分なりのデータを分析してみたいという方に向いています。これまでの主題例は最新のものも含めて関連URL記載のサイトから見ることができます。

ゼミ全体の流れは次の通りです。（1）まず、内容分析を使ってどういった研究ができるのかをプレ演習から演習Iにかけて学びます。同時に、プレ演習では内容分析の体験をします。（2）演習Iではヒューマン・コーディングの手法を学びながら、それを用いた調査プロジェクトをチームごとに実演します。（3）同様に、演習IIではコンピュータ・コーディングの手法を学びながら、それを用いた調査プロジェクトをチームごとに実演します。（4）演習III～IVは、卒業論文の作成を前提に進めます。ここではチーム内で主題を共有しながら、そのもとで一人ひとりが独立したプロジェクトに取り組みます。たとえば原発報道というチーム主題のもとで、あるものは新聞に取り組む、あるものはTVに取り組む、などです。それらの結果を卒業論文にまとめ、年度末に報告します。（5）演習I～IVにかけては、並行してサブゼミを実施します。その中では、マス・コミュニケーション理論とジャーナリズム史、論文執筆法、エクセルの使い方、コンピュータ・コーディングの詳細、データ分析法といった基礎的スキルを学びます。（6）また、各学期に２度ほど、サブゼミの時間にメディア・職業人ワークショップをおこないます。

春学期、秋学期演習とも、第16週に発表をおこなっています。